

『ブルジョアの制限』と誤訳

加藤 正

ヒューマニズムの問題の中心点は人間性である。『ドイツ・イデオロギー』は人間性をはじめて対象的实践として、人間社会、社会化された人間として、唯物論的・科学的に研究し、処理する道を拓いた。それでヒューマニズムは科学的ソシアリズムに止揚しやうされた。現代のヒューマニズムが代弁している人間性は、真の人間の本質（『社会的人間・社会的関係の総体』の空想的反射・その自己疎外に外ならない）。

所謂イデオロギー論や芸術社会学は、それ自身孤立的に定立された種々な社会階級を、取扱ったが、その後産あとざんがソヴェートで盛に淘汰されつつあることは欣快事である。だが肝心なことは、階級性とは人間性の限定形態である。このことが反省される必要がある。それが人間性の成長と対立してそれから乖離かいりしつつあるか、或いはその発展形態として人間性を代表しつつあるかに論はなく、両者は別の観念である。階級性は人間性そのものの限定であり、後者は前者から独立に存在し、前者の基底を成している。

人間性、人間活動、一切の創造的活動の根源は社会の生産力の中にある。それに基づく人間結合の社会化傾向に表現される。それは宗派的制度的な隔絶と相剋、創造性の枯渇と愚鈍に対立する。偉大な人間精神の巨匠たちは、階級的制度的身分的限定にも拘かかわらず、それを通じて発現する人間性の富を分析した。そして人間性の解放としてのコンミュニズムを築き上げる媒介となつている。時代が転回期の醞酵状態にあるときには、人間の創造的活動は屢々しばしば階級的制限の外へ奔出した。そして作用と反作用とを通じて遂ついに一階級の下に制御され、『その下での成長』とい

う形態をとるまでには相当の歴史的闘事を要するのである。

勿論^{もちろん}、いまヒューマニズム論をやる気はない。実は先頃、邦訳『自然弁証法』の改訂表を発表する積りで、も一度原文と対照して見たところ、種々不完全さを発見したが、中でも下巻六頁、『有産者階級の近代的支配の基礎を造ったところの人々は、ブルジョア的に制限されているという一点を除いては、申分のない人物であった』は、全く興ざめだった。これは勿論^{もちろん}『何はともあれ、ブルジョア的な制限（偏狭さ）だけは持つて居なかった（アルレス、ヌール・ニヒト・プエルゲルリヒ・ベシュレンクト）』の誤りである。この一句はマルクス・エンゲルスの芸術論に関する抜萃集には大低のついている。それらは露訳からの重訳だが、どうなつていたか手許にないから参照できないが、今日『文芸』三月号、シルレルの「エンゲルスと世界文学」を読んでいたら、『何ひとつ出来ないことはなかった。彼らに欠けているものといえば、ただ一つブルジョア的な束縛だけであった』となつている。（露訳はチェム・ウゴツノで、何はともあれという日本語の言いまわしに恰度^{ちやうど}あてはまつているのは面白い）。もし万一拙訳の誤りが影響しているのだとすれば恐縮だと思つて、とりあえず訂正します。

昭和三年に加古君の原稿が届いたときには、勿論^{もちろん}正訳されてあつたのだが、当時の僕の観念ではブルジョア・イデオロジストにブルジョアの制限だけはなかつたという逆理が呑み込めなかつた。それに辻褄を合わすために、無理をすればああ誤訳できなくもない気がして、赤インキを入れた次第。無学者はこれだから困る。制限された狭い観念に支配されているときには、言葉が言い表わしている通りに素直に意味をとり上げないで、種々工夫をこらして、とんでもないことになってしまう。これは人類の社会財産である言葉に対する偏狭な暴力である。語感というものは確かに人間性の血液であるのだ。僕が翻訳をはじめた頃には、福本弁証法の影響で論理的言い廻しが盛で、何でもない言葉に対しても弁証法形式の衣をきかせてでないと頭へはいらなかつたものだ。その頃の河上博士の翻訳はその意味で苦心の作である。例^{たと}えば資本論第二版の序を「本氏に従つて『端初（弁証的思考の意味で）は困難であ

る』と訳して、『物はすべて初めがむつかしいという諺は』と福田博士から野次られたのも此頃だ。その福本氏も中々歪曲党で、自分の観念論の典拠とするために、『材料を細大もれなくとり集め』という櫛田訳を誤訳となし、『材料を瑣末に到るまで占有』することによって材料の統一性を研究の最初から規定してかかろうとした。これらは言葉だけをとれば誤訳とまではゆかぬが、更に例の『意識とは意識された存在』を、言葉通りに読まないで、ある種の観念論の観念に従って『意識的乃至意識ある存在』と読み、ベヴストには受身の意はないなどと言いつと、これは完全に誤訳である。ソシアリストというのはソシアリズムの単なる形容詞であるにすぎないのに、ソシアリスト・リアリズムが自分の偏極した観念に都合のいいように現われてくれないからと言って、社会主義者リアリズムという新訳をつけて、新解釈を工夫する人もあった。唯研ニュース六六号では『宗教は民衆の阿片』という端的な表現を素直に汲めない人が、それを国民の阿片と訳し変えて、生きた言葉にスコラの鎖を引ずらせている。『自然弁証法』上巻一〇一頁『そのままの自然のみでなく、人間による自然の変化こそ人間思维の根本的直接的な基礎』という箇所も、嘗てこの『のみ』を削除したところ（唯研昨年五月号一三〇頁）、模写論の見地から再考の余地ありという意見もあった。蓋し、客観的実在としての自然に対する盲愛が、素直な読みとりを不満ならしめているのであろう。いまは記憶にないが、もしかしたら僕もそんな偏狭さから、わざとああ訳したのかも知れぬ。特殊の臭味のある偏狭な言語によってしか話せぬというのは、その人の観念の偏狭を示すものだろうが、言葉を、書いてある通り読めないのも御同様だ。

僕は、文芸学の協働者諸君が、文学を素直に、書かれてあるままに読むことを教えることによって、吾々を人間性の理解に教育してくれることを大いに望んでいる。レッシングはもつと注目されてよい人間だが、彼が他の啓蒙家と相違する点は、エンゲルスが『中世の遺物に対する戦が観察を偏狭にした』と指摘した欠点から解放されて、宗派の中に人間性の成長を読み、それを宗派から解放してそれ自身として展開する歴史的眼識をはじめて確立したこ

とにある。過去の芸術的成果に人間性の成長を読み、それを社会的人間の成長の相として把握し、かかるものとして新しい芸術の中へ展開させることを教えない文芸学は、社会主義的文芸学ではない。人間性の自己疎外の中で動いている偏狭な観念だけが、人間性の結実を、抹消したり、見落したり、戯画化したり、『誤訳』したりする。民族心酔者が民族における人間性の展開を誤訳したり、ジイド的『ヒューマニズム』がソヴェートのソシアリズムを誤訳したりするのも見つともないが、ソシアリズム傾向の思想が偏狭な階級概念によつて人間性を忘れ、過去の遺物に対する戦から観念を偏狭にすれば、それはもうブルジョアの制限乃至偏狭の裏返しであつて、ソシアリズムでもなければヒューマニズムでもない。人間性と階級性の問題は、単に創作方法と世界観というような派生的な形態でのみ観察さるべきでなく、それ自身対象的現実として科学的に分析さるべき独立の題目である。それらのことに、僕の誤訳が拘束観念となつては面目ないから、毒を変じて薬となす意味で訂正します。

(三・三)

『唯物論研究』第五四号、一九三七年四月

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。